

| | | | | | | |
|-----------|---|----------------|------------------------|--------|------------|-------|
| 申請者 | 学科名 | デザイン工学科 | 職名 | 准教授 | 氏名 | 津田 勢太 |
| 調査研究課題 | 遠隔地域の住民との協働による公園活性化デザイン手法 その2 | | | | | |
| 調査研究組織 | | 氏名 | 所属・職 | 専門分野 | 役割分担 | |
| | 代表 | 津田勢太 | デザイン工学科・准教授 | 建築構造 | 全体統括 | |
| | 分担者 | 中原嘉之 | デザイン工学科・助手 | デザイン模型 | 工事作業全体の指揮 | |
| | | 伊藤立平 | 伊藤立平建築設計事務所代表, 本学非常勤講師 | 建築設計 | 設計協力, 地域折衝 | |
| 柘田洋子 | | 桃李舎代表, 本学非常勤講師 | 構造設計 | 設計協力 | | |
| 調査研究実績の概要 | <p>1995年の阪神大震災において、日本のボランティア活動、助け合い精神が大きく進展したと言われている。2011年の東北大震災では、日本全国から団体や個人により様々な形の支援活動が行われてきた。各地の建築学科を有する大学からは、被災地に建てる仮設住宅や集会施設などのデザイン、労務作業、材料などの提供が行われている。被災後2年間ほどは活発に行われてきたこのような復興支援活動も、時間の経過とともに少なくなってきており、未だ仮設住宅に暮らす方々からは、もう忘れられたのかと考える人も多いという。</p> <p>そのような状況のなか、福島県南相馬市鹿島区の仮設住宅が管理する広場に、大学の授業で制作した木造茶室を移築するプロジェクトを昨年度に実施した。もともとは茶室としてデザインして制作したものだが、この場所の特性を考慮して、普段は子どもたちの遊び場として、イベント時には舞台として活用できるように学生主体でデザインしなおして制作した。</p> <p>この仮設住宅には原発事故により避難指示を受けた南相馬市小高区や原町区からの避難者の方々が暮らしている。小高区は原発20km圏内であるが事故当時の風向きからずれたため、線量はもともと低い地区である。H27年9月の時点では避難指示解除準備区域に指定されており、H28年4月の避難指示解除が予定されていた。帰還の日に向けて、地元有志の方々を中心としたイベントが小高駅前などで開催され、地元に戻ろうという機運づくりが行われていた。</p> | | | | | |

避難指示解除後の生活に向けて様々な準備が進められている。「小高を応援する会」という団体は、小高を訪れた人や地元住民などが交流することができる場所として、「おだかぶらっとほーむ」を小高駅前にH27年10月にオープンしている。ここに来た人がだれでも気楽に訪れて、休んでほしいという思いから、地元民により作られた場所である。また、避難中の住民の方々が作ったグッズなどを販売するアンテナショップ「希来」も小高駅前で営業している。

駅前のメインストリートには鉢に植えられたキレイな花が並んでいる。長い間、誰も住んでいなかった町であり、一時的に帰宅した住民が町を見て寂しいと思うことがないよう花を並べたということである。避難先の鹿島区の仮設住宅に農園を作り、そこで育てた花を持ってきたものだそうだ。花があるとないのでは町を訪れたときの印象は大分違うであろうと感じた。

小高駅のすぐ前に、訪れた人がくつろげる公園のような場所を作ろうということが、これも有志住民により企画された。花に囲まれたカフェのようなスペースをつくらうという計画である。仮設住宅の広場に設置した東屋は、この場所に再移築することになった。南相馬は福島県では浜通りとよばれる太平洋岸の地域であり、透き通る青空が広がる土地である。青空のもと、花を見ながら明るい気持ちになれるような休憩スペースとなることを目指し、イベント時に大勢の人が使えるようにしたいということも考慮して、舞台とベンチを制作した。H27年9月、現地の方々の協力のもと、5日間で移築作業を実施した。大学からの参加は教員3名、学生7名、卒業生1名である。

調査研究実績
の概要



図1 解体



図2 運搬



図3 作業風景



図4 完成